

シンポジウム2

大坂蘭学の実験的・実証的性格

浅井 允 晶

堺女子短期大学・教授

大坂の蘭学は、町人社会という特有の基盤のうえに成立する知的活動によって推進された。ここでは、その基本的性格というべき実験的・実証的ありかたに視点をすえ、検討を試みることにする。

蘭学という概念に限定する限り、大坂のそれは橋本宗吉の活動に始まった。宗吉は、オランダ語理解の必要性を痛感する間重富と小石元俊の支援を受けて、江戸の大槻玄沢の芝蘭堂に遊学し、帰坂後絲漢堂と称する蘭学塾を開く一方、医学書や電気学書を記述・刊行して、語学にもとづく本格的な蘭学の基盤を大坂で成立させた。加えて、『阿蘭陀始制エレキテル究理原』にみられるように、エレキテルについて翻訳した理論を

実験で実証的に確認する手法を用いて成果を遺した。

しかし、その前提には、実測重視の立場を採り、漢訳西洋天文書を利用した麻田派天学の展開や、蘭方系医学の採用を進め、やがて人屍解剖に至る小石元俊らの活動が存在する。次いで、宗吉の門やそれを取り巻くグループのなかから、伏屋素狄（万町権之進）や大矢尚斎、斎藤方策、中天游、各務文献ら実験・実証を旨とする実証的な医家が輩出した。伏屋素狄は、墨汁の注入により腎臓の濾過機能を確認した実験生理学の開拓者。大矢尚斎は、蘭学と産科に長じた実験用医療器具の創案者。各務文献は、骨格や骨関節の運動機能についての研究者。また斎藤方策は、小石元俊門で漢蘭折衷医学を学んだ科学的・合理的立場の臨床家であり、中天游と共に『玉函』把爾翁煙（ヨハン・バルヘイン）解剖図譜』を共訳した存在である。中天游は、橋本宗吉のみならず大槻玄沢・海上随鴟にも師事した医家で、緒方洪庵の師として知られるが、自らの蘭学塾、思々齋塾でのテキストに志筑忠雄の『曆象新書』を用いるなど、幅広く多くの成果をあげた蘭学者であった。そ

の後を承けて適塾を開き、除痘館を推進した緒方洪庵が、蘭方系医学の研究にもついでその導入と普及に尽力したことは、有名である。しかも、洪庵が、「毎年五月十月二回、幸町ノ下流芦嶋ニ於テ解剖」(武谷柘之『南柯一夢』)を実施し、理論を実験的・実証的な裏づけと共に捉える立場を築いている点は、注目に値する。

もとより、これ以外にも、それに先行する業績を遺した永富独嘯や、木村兼葭堂あるいは山片重芳らのように収集した文物に即して学を進める蘭学系の知識人など、それに関わる人々は多く知られる。それだけに、こうした方向だけでは捉えきれない面があるが、このように見てくるだけでも、大坂の蘭学の基本的性格は浮き彫りにされてくる。実験的・実施用的手法を尊重して、自由な立場で具体的な事実の解明に精力を傾けるそうした学問姿勢は、実践的でしたたかな創意・工夫の精神と直結する。そこに、たくましい大坂の町人社会の気風に同調する性格も認められよう。これらは一八世紀の繁栄期に五人の町人同志によって懷徳堂が開設され、幅広く学問を好む気風がみなぎっていた風

潮などとも無縁ではあるまい。